

利用者処遇について（事業計画書）

利用者処遇について、事業計画書の雛形内に収まりきれなかったため、本書類にて提出いたします。

【当施設の理念】

子どもたちの個性を尊重し 興味・関心の幅を広げ ”できる”を増やし 「子ども」「親」「カイト」三位一体となった指導・教育により 子どもたちの将来的な自立を支援する。

【当施設の特徴】

当施設は発達理論に基づいたプログラムにより、子どもたちが心・技・体を伸ばすことができるような療育を行う。下図の通り、各プログラムを「ココロプログラム」「ワザプログラム」「カラダプログラム」と称し、3 軸でプログラムを展開する。



ココロプログラム

特性を持った子どもたちが日頃から抱えている不安やストレスなどを少しでも軽減できるよう努める。またプログラム自体も感性や個性が磨かれるものを採用し、本来子どもに備わっている個性や感性をより伸ばすことができるよう様々な体験機会を提供する。当施設**専用のグラウンド**において、大自然の中で走り回るような運動であったり、土や草などの自然に触れながらの農業体験、収穫した野菜を用いたクッキング、また絵を描いたりみんなで楽器を演奏したりして知的好奇心を刺激しながら感性を磨いていく。

（支援例：アート）

アート制作は感覚器官に対する刺激や製作に伴う運動が心身の機能回復や維持に役立つことや、ものづくりの楽しさや達成感が生活の質を高めると言われている。また人の心を癒やすだけでなく、言葉で表現しづらい気持ちや感情を表現できるような機会を提供する。

ワザプログラム

無理のない範囲で、社会生活を営んでいく上で必要なソーシャルスキルを見つけていくことを目指す。障害の有無に関わらずソーシャルスキルの得手不得手に関しては個人差が大きいため、子どもたちひとりひとりに合った人付き合いの仕方、集団参加のスタイル作り、将来的な自立・就労準備のサポートをする。

(支援例：SST)

集団行動や人間関係を上手く営むために必要なソーシャルスキルが年齢相応に備わっていない子どもに向けて、「学習姿勢」「コミュニケーション」「身辺管理」「情緒や自己」に関するスキルを習得することを目指す。

(支援例：自立・就労準備)

主に中高生を対象として、高校卒業後を見据えて日常生活スキルの訓練はもとより、社会へ出た時の挨拶から始まり、社会の一般ルール、ビジネスマナー、仕事をする上でのスキル、長時間勤められる集中力、仲間と力を合わせて仕事をする協調性などを習得できるよう、お子さまと一歩ずつ進めていく。また就労場所を肌身で感じる体験や軽作業を中心とした仕事の体験も、日々の活動に織り交ぜていく。

カラダプログラム

体を動かすのに特に重要な初期感覚（平衡感覚・固有感覚）と視覚・聴覚のトレーニングを行い、子どもたちが楽しみながら感覚と体のつながりを感じられるようプログラムを提供する。

(支援例：視覚)

ビジョントレーニングを用いて、眼で映像を捉える「入力」機能、見たものを認識する「情報入力」機能、見たものに合わせて身体を動かす「出力」機能を高め、見えにくさからくる様々な悩みを解消できるようトレーニングを行う。

【当施設の保護様対応について】

- 家庭での療育疲れによる身体的・精神的ストレスの軽減、息抜き時間や家事時間の捻出など保護者の一時的休養を促す。
- 送迎時のコミュニケーションを大切にしながらも、スマートフォン(またはPC)で子どもの日々の成長が確認できるようデジタル技術を導入し、活動の記録や写真をクラウド共有する。
- デジタル技術を用いることで、日々の活動の様子はもちろんのこと、子どもの現状の課題や療育目的などもスマートフォンで確認が取れるため、保護者と職員とが共通認識を持てるようになり、利用者によりきめ細かくサービスを提供できる。
- 保護者との連携を密に図り、時に相談会や保護者会の場を設定することで、保護者同士の繋がりやお互いの悩み・成長の実感などの情報を共有し、相互理解を促すことができる。